

論 説

職人仕事の本質

— 仕事による人間の成長 —

岩 田 均

目 次

- はしがき
- I 職人仕事の特徴
 - 1. 財の性質を考える
 - 2. 生産性を考える
 - 3. 規模の利益を考える
 - II 職人仕事の本質
 - 1. おもてなす関係
 - 2. 技を磨く
 - 3. 構想を練る
 - 4. 人としての成長
 - 5. 文化資本
 - III 職人経済の展望
- あとがき

は し が き

産業革命以降の産業の近代化は、人類史上未曾有の「産業発展」をもたらしたと言われるが、今では、その負の側面が人類生存の危機をもたらすとの懸念も高まっている。日本は、産業の近代化を達成しつつ、近代化以前の職人仕事を比較的大切にしてきた国であるから、産業近代化の限界に対応する職人仕事の再生の意義と可能性を考察する使命があるのではないかと。

しかし現実には、資本力と技術力にものをい寄せた大工業システムの出現によって、職人産業は壊滅的な打撃をうけており、その再生の糸口となる理論を見出すことも困難である。そこでこの小論では、主に J. ラスキンの固有価値や W. ボウモルの外部性などの文化経済理論を手がかりとして、職人仕事のもつ意味を再評価し、その本質を明らかにすることを目的とする。その要旨は次のとおりである。

職人仕事が産み出す品々は、現代のグローバル化した市場メカニズムでは評価しきれない豊潤さをもっているがゆえに、その価値は、過少にしか評価されずに衰退する。職人仕事は、この評価の枠組みを超えるところに本質がある。つまり、固有価値を生かそうとする職人仕事を通じて、卓越した技と美を具現化した徳のある人格が生まれ、地域社会や産業の核となる文化資本が形成される。したがって、職人仕事を中軸に据えた経済を構築することが、現代産業の限界を突破することにつながるのである。

I 職人仕事の特徴

職人仕事は一般に、近代以降の流れに取り残された存在と見なされてきたが、近年になって、その再評価の声も聞かれるようになった。この節では、近代的な大工業と比較した職人仕事の特徴として、財としての性質が単なる私的財ではないこと、その価値が生産性の向上や規模の利益では測れないこと、機械文明ではなく地域文化に立脚していることをとりあげる。近代工業がつくりあげてきた価値観や社会制度と異なる、もう一つの産業が成立しうる条件を考える。

1. 財の性質を考える

近代以降の資本制社会は、私的財である商品の生産・交換を主軸として成り立つとされる人為的な経済社会である。これに対して職人の世界は、私的財の枠組みに収まりきらない広がりをもつ自生的な世界である。

(1) 産地の秘訣

伝統的な職人仕事が生産的な工業生産に伍して生き残ってきたのは、産地を形成し産業集積の力が発揮されたからであるといわれる。では、産業集積の力とはいかなるものなのか。かつて筆者が、丹後ちりめん産地で聞き取り調査を行った際の記録をもとに考察しよう。丹後の古老に、産地の変容の姿を自由に語っていただいたものである¹⁾。

「野中の一本杉ではいかん、皆でいっしょに森になろう」という精神が昭和 30 年代までは生きていたが、昭和 40 年代以降は、自分だけ良ければとの風潮になってしまった。銀行や商社が、目先の利益を優先する悪い考えを植えつけた。かつては困っていれば周囲が助け、失敗しても応援し、世間が人間を見る目をもっており、皆で人を育てようとしていた。

丹後は、地域ぐるみで技術を築いてきた。一人がアイデアを出すと皆で改良し、教えあって皆のものとした。技術は決して一人のものではないのに、個人の欲のために海外生産したのが間違いであった。

ここで特徴的なことは「皆でいっしょに」という精神が、産地の中に一貫して流れていたことであろう。しかし、伝統的産地の中にも経済合理主義の考え方が次第に持ち込まれて、「皆でいっしょに」よりも私的利益の追求に走り出し産地が衰退してしまったという、深い洞察にもとづく指摘であった。

この地域協働の産業の仕組みを、A. マーシャル(1842-1924)が学術的に述べている²⁾。マーシャルは、ある地域に集積された特定の産業(地域特化産業)が、世界中でおびただしい数にのぼっていることをとりあげ、産業がその立地をいったん選定すると、永くその地にとどまるのはな

1) 1999 年 1 月に行った丹後地域の加悦町(現京丹後市)の糸商経営者からの聞き取り内容。

2) マーシャル(1890, 邦訳 1966, p.250-256)。

ぜかを問うた。そこでマーシャルが見いだしたのは、「近隣から得る利便がたいへん大きい」という「外部経済」であった。外部経済の内容として、秘訣の伝播、補助産業の発達、機械の使用、特殊技能者の市場をあげているが、この中でも特に注目すべき「秘訣の伝播」について、次のように述べている。

その秘訣は、もはや秘訣ではなくなる。一般に広くひろまり、子どもでも学ぶ。よい仕事は正しく評価される。発明や改良は、たちまち「口のは」にのぼる。アイデアはさらに新しいアイデアを生む。

産業上の秘訣は、地域内では秘訣ではなくなり、地域の人々に広まってさらに磨かれる。この秘訣は、主に人から人に直接伝達される暗黙知であること、人と人の情報交流が濃密な地域内で共有されること、したがって、地域外には伝達されにくい地域限定の産業上の秘訣となるために、地域産業の競争優位の源泉となる。丹後産地の古老たちは、マーシャルの洞察と同じ智慧を体得していたのである。

(2) 混合財と共同財

このように、職人仕事は元来、通常の企業が私的利益を追求する私的な存在として規定されるのに対して、社会的な存在として位置づけられる。このことを、経済学が対象とする「財」の概念から、考えてみたい。標準的な経済史によると、近代以降の資本制社会は、営利組織として企業が供給する「私的財」（商品）を主軸として成立し、非営利組織としての政府が供給する「公共財」が私的財を補完するものとして存在する、という枠組みを提示している。これを前提に、三つのテーマが浮上する。

第1に、企業と政府という二つの支柱だけではなく、第三の柱として市民セクター³⁾の役割が重要になる、というテーマである。非営利動機の市民が公を担うという議論は、活動主体を考える場合にきわめて重要であるので、外部性を内部化する主体として着目する必要がある。職人が現代の町衆としてまちづくりに積極的に関わるのである。

第2に、私的財でもあるが公共財でもあるという準公共財（混合財）の考え方が、W. ボウモルらによって芸術財を対象に提示されている。本論文のテーマである職人仕事の本質を把握したうえで外部性を考えることは、その公共財としての側面を抽出することであり、芸術財に習って考察することが重要な課題となる。

第3に、資本主義社会固有の私的財と公共財に分化される前の「共同財」という概念規定に着目したい。社会学では「コモンズ」といわれる地域共同による所有や管理および利用の仕組みであるが、これを経済学が考察する対象に拡張しようという試みである⁴⁾。ここから、私的財と公共財に分化された共同財を現代的に再統合することによって、現代社会の限界を超える

3) 市民セクターは、サードセクター、社会セクター、民間非営利セクターなどとも呼ばれる。

4) 共同財の概念は、後藤和子（1998, p.15, 21）による。

展望が開かれる。私的財や公共財を、「自分たち皆のもの」に変換・回帰することは、「ご近所の底力」となり、市民の多様な能力を引き出すことによって、現代社会の問題解決に対する大きな力となりうるのである。

先に見たように伝統的な職人仕事は、そのコアとなる秘訣や技術、さらに人材までが共同財として存在していたのである。したがって、職人仕事の第一の特質として、近代工業が私的財の思想に染め上げられているのに対して、共同財であることを指摘する。職人の世界では、仮に私的に所有していても、私的所有権をことさら強く主張するのではなく、多くの人々や社会に役立つように使ってほしい、という心情が美德とされる社会であった。職人仕事の間である町家は、私的財でありながらも地域社会の人々に開かれた共同財としての柔らかな空間をも持ちえたからこそ、永く愛され魅力を持続してきたのであろう。私(家)と公(地域社会)が断絶しないで、ゆるやかに関係する共同財のあり方には、現代社会の様々な行き詰まりを克服する智慧がつまっており、社会的起業のヒントにもなる。

共同財は、準公共財と同様、公共的な側面をもつものの、政府が関与することには直結せず、関係する人々が自治的・集合的に管理し利用する側面から規定した財である。つまり、公共財は、政府が供給する財であるが、共同財は、自治的な市民組織が供給する主体となる。職人仕事を共同財として位置づけることによって、単に公共性があることを指摘することに止まらず、私的財化された職人仕事を再び本来の共同財の姿に戻すことによって、自覚的な市民の多様な能力が結集されて、職人仕事本来の能力が蘇るのであろう。

2. 生産性を考える

近代以降の経済発展の原理は、たえざる技術革新で生産性を高めることによって、モノを効率的に生産し、コスト競争で優位に立って利益をあげることであった。この工業社会の原理が勢いをもって伸びゆく時代や、この原理がもつ矛盾が大きく露見されない時代には、職人企業から近代的な工場生産をめざす者もあらわれ、職人仕事は遅れた存在とみなさることが多かった。

しかし、工業原理のみが支配する社会では、人間の個性や創造性に依存する産業が衰退してしまう。このことを理論的に明らかにした研究成果を「ボウモルのコスト病」という。

(1) ボウモル病

1960年代のアメリカでは、かつてない文化のブームが湧き上がり、大衆が音楽や演劇などを楽しむ本格的な文化の時代が到来すると楽観的な見方も強まった。しかし、この文化を享受する動きは社会に定着しうるのか、芸術を供給する団体の経営状態をよく調査する必要があり、と考えたのが W. ボウモルらであった⁵⁾。

5) ボウモル&ボウエン(原著1966, 邦訳1994)

彼らは、全米の舞台芸術を悉皆調査した結果、舞台芸術のように、熟練を要する人的資源に依存する産業には、①製品や製造過程を標準化・機械化し、生産性を高めることができない、②機械ではなく人間の熟練労働の投入が製品やサービスの質を決めるだけの重要性を持つ、というビジネス上の特徴があるので、自動車産業のように労働生産性を高めて販売価格を下げることはできず、芸術産業の販売価格が相対的に上昇して経営危機に陥ることを論証した。

たえざる技術革新による生産性向上を競い合うことによって市場支配力を強める工業分野の比重が増す社会にあって、舞台芸術のような非工業分野では、構造的に経営困難に陥り衰退してゆく傾向が強まるのであり、このような現象は「ボウモルの病」と呼ばれる。

このボウモル病は、舞台芸術に限らず、多くの産業や分野に当てはまることに注視する必要がある。たとえば、教育や医療はもちろん、対話を重視する地域商店、修養年数を要する熟練の技、心通わせる介護や育児、天然性や地域固有性にこだわる食品等々、生活の質や高齢社会のニーズに対応する近未来型の産業に多い。これらは、熟練した人手と時間を必要とし、標準化や機械化は質の低下を意味するのである。

この理論は、標準化・機械化をすすめて生産性を高める工業社会の原理の限界を明らかにしており、文化経済学の基礎理論として位置づけられる。応用範囲は広く、伝統産業や職人仕事の経営困難性や衰退傾向の根本的な要因として、このボウモル病があることを認識する必要がある。

和装産業などの伝統産業が衰退した原因や対応策として、従来よく議論されてきた内容を整理すると、①生活様式が洋風化し需要が減退したのだから仕方がない（放任論）、②需要を創出するという経営努力が不足する（経営責任論）、③競争がなく過保護で甘えている（規制緩和論）、④価格が高くなりすぎ買いたくとも買えない（高価格論）、などであろうか。ここで特徴的なことは、マクロの産業構造の問題として認識されず、企業間の競争の論理と同じように自己責任論に転嫁され、自助努力が足りないなどという世論が形成され、伝統産業関係者は萎縮し自信を喪失し、後継者は離散してきたのである。

ボウモルらが見いだした理論の意義は、熟練の典型としての職人仕事の経営困難さを自己責任論に陥ることなく、外部性を認識することによって、ボウモル病を克服する処方箋を書いたことにある。

つまり、芸術に対する公的支援の妥当性について、消費者による市場を通じたテストだけではなぜ不十分なのかという観点から、芸術を私的財と公共財の両面をもった混合財（準公共財）として規定することによって説明する。市場でチケットを購入した観客に対して、私的財として直接的便益を提供するだけでなく、公共財として広く大衆に提供する利益（外部性）が少なくとも4種類あるという。彼らが指摘した芸術のもつ外部性とは、①国家に付与する威信、②周辺のビジネスに与えるメリット、③将来の世代のために、いま芸術に支援する必要性、④

よき市民・社会をつくりだす教育的貢献, の 4 点であった⁶⁾。

ここに, 生産性の原理に当てはまらずに経営困難に陥っている多くの産業にとって, 再生に向けての理論的な道筋が示されたのである。

(2) 手描友禪の生産性と職人性

職人仕事の現場では, 生産性と職人性をめぐって, どのような葛藤が生じていたのか。染呉服がブームであった 1974 年度に, 筆者が担当した京都の手描友禪業界の診断から観察することとしよう⁷⁾。診断の直接の対象は, 手描友禪の各工程を統括する染匠(悉皆業)であり, 有効回答のあった 114 事業所の集計を行っている。

京都の手描友禪は, 精練・漂白, 湯のし, 絵羽縫, 下絵, 紋糊置, 模様糊置, 挿し友禪, 色引染, 黒引染, 蒸し・水洗, 彩色, 金加工, 刺繍, 紋洗い・地直し, 紋上絵, 上絵羽といった, 細分化し専門化した多くの職人工房によって仕上げられる。各工程の職人は, まずは親方の下に弟子入りして, 生活をともにしながらカンやコツを身体で覚えるのが基本である。細密な分業のため, 間口は狭いが奥義を究めるための熟練が重んじられる。刺繍, 糊置, 下絵, 彩色などの工程では, 内職者も相当数従事しており, 手描友禪加工に関係する従事者は, 染呉服ブームであった 1970 年代前半には京都市内で 2 万人前後に達していたものと推計される。

なお, このときの業界診断であげられた京都手描友禪業界の課題は, 技術者養成, 生産効率, 取引関係, 流通系列, 企画・意匠, 資材不足, 海内生産, 組織化の 8 項目であった。技術者(職人)養成の課題と, 生産性を追求する動きにいかに対処するかが, 一対の問題として認識されていた。染呉服ブームがおこる中で, 大手商社の動きを頂点とし, 京都室町の染加工問屋(仲間卸)が大規模化し, 友禪産地を統括する染匠を系列化するような動きが見られた。ここでは, 生産性向上や規模の利益を求めて, 手描友禪の海外生産や量産化, 工場生産化などをすすめようとするものであった。

生産性を向上させる動きの第 1 は, 量産型手描友禪である。量産もの手描友禪を手がけるのは, 売上規模の大きい染匠に多く, 中小規模の染匠は, 追加注文以外は一品生産を基本としている。量産手描の加工方向としては, 型紙によって糸目糊を置く「型糸目」が多く, 挿し友禪を型でやる場合も含め, いわゆる「型併用」の手描友禪の手法がある。また, 未熟練者を大量に使っての量産もある。下絵, 友禪, ろうけつなど主要な工程部分を自家加工している例や, 一定期間の実習を積んだ内職者を, 専属的外注先として大量にかかえる例もあった。

第 2 に, 工場内での一貫生産がある。京都以外での手描産地としては, 十日町, 金沢, 東京, 名古屋, 長浜などがあげられるが, 金沢の加賀友禪は, 産地規模は小さいが, 「作家」の指導

6) 同上 p.496-499

7) 筆者は, 1971～74 年度および 1987～88 年度の通算 6 年間, 京都府立中小企業総合指導所に在席し, 友禪・西陣・丹後などの伝統的染織産地の診断業務を主に担当・執筆した。

性が強く、精緻な技巧をこらした高級品が人気をよんでいる。これに対して、十日町は近代的工場による一貫生産の典型例を示している。十日町産地では、昭和40年頃から後染への転換にいどみ、中振袖では京都をしのぐ生産量に達した。十日町の呉服メーカーは、多数の従業員を雇っての一貫生産であるため、①メーカーが少数で、産地内での生産調整が比較的容易であること、②従業員に「賃金労働者」の意識が強く、労務問題がより深刻であること、③不況時に「収縮」することが困難であること、などの特徴が指摘された。生産の合理化をどこまで進めるかとか、手工芸性・逸品性に限界のあることなどもあげられた。

第3に、韓国での生産である。戦後の和装ブーム期には、韓国での手描友禅技術の修得意欲はきわめて強く、かつそのテンポは早いものであった。これに対して京都府は、「日本政府および大企業は、重化学工業部門の資本輸出を促進し、その見返りとして途上国の安価な労働力を利用した消費材工業製品の輸入に対して特惠関税を与え、いわゆる国際分業体制なるものをつくりあげることにより、わが国の軽工業部門、特に中小企業部門および伝統産業部門を犠牲にしようとしている」との認識を示していた⁸⁾。また、和装分野への進出については、生産効率を高めようとする大商社の利潤動機が本格的進出の大きな要因になっていることを指摘している。

このような生産性向上の動きに京都の手描友禅業界が巻き込まれた結果、大手商社を頂点とする流通系列が形成され、業界内の格差が拡大した。室町の仲間卸を中心とする大手の染呉服問屋においては、大手総合商社との系列関係が形成され、さらに大手問屋と大手染匠との固定的関係を構築した。染匠での売上高の大規模層への集中も、急激な上位集中ではないものの、傾向的には着実に進展していたのである。染匠の「従事者1人当たりのマージン額」では、小規模染匠（年商2,000万円未満）では161万円、大規模染匠（年商2億5千万円以上）では434万円と、大きな格差が見られた。零細層では家族従事者が約半数を占めており、家業であるがゆえに、経営が続けられているとも言えよう。低価格で市場シェアをおさえる生産性の効果が、本来手仕事を主とする手描友禅の世界にも現れていたとみてさしつかえなからう。

しかし長期間続いた染呉服ブームも、昭和48年夏以降の不況の長期化の中で、実需とかけ離れた仮需ブームの側面が強かったことが露見した。一貫生産手描や、量産手描、さらには韓国手描へとエスカレートした企業は、ブームが去れば痛手を受ける。大手商社は、旨みがなくなると撤退し、染匠における仲間問屋からの受注も大幅に減少し、元の堅実な産地経営に回帰してゆく。

8) 京都府中小企業対策協議会染織業界振興対策部会「報告書」（昭和49年1月）

3. 規模の利益を考える

アメリカ型の大量生産体制に警鐘を鳴らし、クラフト的生産への転換を薦める動きも注目されるが、雇用不安をとまなう世界不況が深まると、価格で勝負する「規模の利益」がまた目立つようになる。では、小規模な職人企業が存続しうる姿は描きうるのだろうか。それは、企業が単独で利潤追求に突き進むではなく、家業として文化資本を蓄積し、地域社会とのつながりによって強みを発揮する姿として見いだすことができる。伝統産業が教える近未来の地域産業の姿といえよう。

(1) 家業と家訓

伝統的な職人仕事は、家族が協力し合う家業として営まれることが多く、それぞれの家業が独立しながら社会的分業の中で、多くの関連業との連携によって、統一したコンセプトの下で品々が完成される。近代的な企業が、企業の中に多くの機能を取り込む垂直統合（大企業化）をめざすのに対して、間口が狭くて奥行きの高い高度な専門化を究めようとする。個々は小規模であっても、産業集積の効果が発揮されるならば、工業化が主流となった現代の市場経済の中でも生き残ってきたのである。

企業が永続する秘訣を、老舗の家訓の存在に着目して研究した成果が残されている。京都府制 100 年を記念して編集された『老舗と家訓』において、足立政男氏は、様々な家訓の内容を整理し、15 に分類し紹介している⁹⁾。その項目は、家名継承、先祖崇拜と信仰、孝道、養生、正直、精勤、堪忍、知足、分限、儉約、遵法、用心、陰徳、和合、店則の 15 項目であるが、家訓の目的は、誉ある家名を永続させることにある。主人の心得として、家名や家財を自分のものと思わず、先祖から支配役を預かったにすぎず、家名が末永く相続されるよう工夫することを第一としている。またそのため、分限をわきまえて家職を大切にし、転業を嫌い、他業に指を染めないよう商売替えを戒めている。老舗の家訓は、家業を永続させるための文化資本として機能したことがわかる。

店則とは、家訓とは別に家業（店）経営のあり方を細かく定めたものである。使用人や奉公人も増え、家業の規模が大きくなって、家と店が分離した店の定めであり、家訓より具体的に広範な内容が記されている。その内容は、遵法、信用、商才、儉約、職分、団結にまとめられる。

また足立氏は別の本で、老舗経営における別家制度、奉公人制度、株仲間制度などをとりあげ、複雑な老舗の社会制度を解明しており、興味は尽きない。たとえば、株仲間制度に関しては、京都という土壌とコミュニティを大切に、その土地に形成された人間関係、特に同業者仲間の団結と和合の精神を持ち続けていることを高く評価している。職商人の家々に残る仲間定書は、同業者の共存共栄のための掟として、「利己主義的生き方を否定し、正直正銘を理念とし、

9) 足立政男 (1970, p.3-7)

仲間とともに生きることを理想とした」ことが記述されている¹⁰⁾。

（2）西陣糸染業の家業回帰

次に、家業の強みを示す、西陣織物の関連業の一つである糸染業の家業回帰の動きを見てみよう。昭和46年の業界診断調査で回収した154企業の総従事者数は2,073人で、家族従事者数は456人(22%)であった¹¹⁾。昭和40年の調査では、116企業の集計で1,677人であったから、1事業所当たりの従業員数は14.5人から13.5人へと減少していた。従業員の構造を見ると、家族従事者の比率が大幅に増えたのが特徴的であった。雇用従業員を雇わず、家内労働だけで事業を営んでいる企業が、1～5人規模では5割を超え、従業員数でもこの規模では76%が家族で占められた。6人以上10人以下の規模では、まだ家族従業員の比重が高く、10人前後を境に雇用者が増加する。雇用従業員の66%が規模上位9事業所に集中しており、さらに2事業所で40%を占めていた。

糸染業界は、大型の新鋭設備を導入して合織メーカーや紡績メーカーの指定工場などになっている中堅規模以上の規模も存在し、メーカーやその特約店商社、系列工場からの受注を主体として、メリヤスや広幅服地などの量産型の染色加工を中心としている。最大手クラスでは、西陣織物用の糸はほとんど扱わず「脱西陣」を完了している¹²⁾。したがって、西陣の帯地などに特化する中小規模層との取引先や製品での競合関係は回避されている。

大多数の西陣織物用の糸を染める職人型工房と、少数の近代化した量産型工場が両立し、またその中間の工場が多様に存在するのが、京都の繊維染色業の特徴であった。その後しばらくたって組合事務所を訪れ、従業員の資料を拝見したところ、平成8年には1企業7.6人へと昭和46年から約半減していた。ある程度は予想していたものの、この数値は予測を超える縮小である。大規模企業はリストラで雇用力をなくし、中堅規模は立ち位置を見出せず、生き延びているのは家業に回帰した職人企業であった。

（3）職住の一体化

家長に人徳があり、公正で賢明な経営が行われるなら、家業のメリットは大きい。とくに、職住一体であれば、人から人への暗黙知の伝承がより濃密に行われる。土井乙平氏は、伝統産業の衰退は、生産者側の生活様式の変容による職住分離が要因となっていると指摘する¹³⁾。職住が一体である家業の場合などには、日常の生活文化を基礎にした伝統の技法が継承されていたのである。

10) 足立政男（1974, p.499）

11) 岩田均（1972）、筆者が社会人になってはじめて担当した業界診断である。

12) 西陣機業家からの注文が少なくなり、工場も西陣から脱出する近代化指向の動きを、この診断では「脱西陣」と呼んだ。

13) 土井乙平（2006, p.57-71）

一流の職人たちの教養と感性が、技術の文化的基盤として存在し…伝統的生産方法を支えてきたのは…人々が日常生活において形成し世代から世代へと伝達してきた生活様式についての価値観や慣習(日常生活文化と呼ぶべきもの)に基礎を置いた技法である。(p.58-59)

ところが、職住分離によって核家族化が進むことによって、伝統の技法に含まれていた多様なノウハウの内の技術だけが伝達され、伝統の強みを喪失したという。

親と子が仕事の話をするのは職場という空間に限定されることになり、また、勤務時間という時間帯に限定されることになる。この核家族化に伴う職住分離こそが、伝統産業を支えてきた伝統的技法を伝統的技術に矮小化し、その結果として伝統を固定的なものにし、伝統産業の発展を自らの手で断ち切っていくことになった。(p.62)

職住分離や核家族化が、伝統産業の本来の力を削いでしまったという。日常の生活文化を共有し継承することから、多様なノウハウを獲得していたのである。この主張は、職住一体の家業の中でこそ、技法という生活文化を基盤とした産業ノウハウが継承されるというもので、産業集積の文化的土壌を考察する際の重要な指摘である。

(4) 社会的分業

職人仕事の産業構造上の特徴は、社会的分業の中に組み込まれた共生の経済として成り立っていることである。西陣や友禅のような伝統産業の産地の構造は社会的分業の典型であるが、地域に根ざしてコミュニティを形成し、個々の企業が独立しながらも相互に依存しあう、柔軟なネットワーク型組織の典型でもある。巨大な機械装置を主とする産業ではないので、人間の原理に基づいた産業組織が、人間の試行錯誤と創意工夫の結晶として形成されたものといえる。

社会的分業で成り立つ世界では、周囲との調和を重んじる配慮や、身勝手な行動を慎むモラルが自然に形成された。一企業が単独で私的な利益を追求するのではなく、地域全体の調和を第一に考えて、日々の生活を律しながら信頼関係を築き、企業間連携による範囲の経済、ネットワークの経済を実現しようとした。

和装産地もまた、分業の成果で成り立っているのであるが、ここでの分業は、工場内の分業ではなく、事業者が地域内に独立・分散して展開する社会的分業の典型である。工場内の分業は生産性を高める目的に特化しているが、産地の社会的分業は、生産効率を高めるとともに、生産の「質」を高めるための分業でもある。そこには、工場内で管理される労働ではなく、生活とともにある自律した労働が息づいている。生産の質と生活の質が直結し、日々の暮らしの中の作法や美意識が、生産物の「用と美」に反映される。

このような職人的な家業を統括するために問屋が存在する。問屋の機能は多様であり、市場への流通を担う機能を核とし、商品企画から生産者指導、生産者間の調整、職人の育成などを

行う場合もある。職人と問屋の関係こそは、産業の盛衰に関わる根本要因となる。職人が生産に専念できるように、問屋が販売機能を担うならば良いが、問屋の職人支配につながるなら、職人の創造的な意欲はそがれてしまう。問屋が多角化やビル化をすすめる、商品企画や職方指導をおろそかにしたために、和装産業が衰退したのだという声もよく聞かれた。

このような問屋に代わって、職人の中から作家が出現する¹⁴⁾。作家とは、ある生産工程での高度な技能やセンスを修得したうえで、分業化された生産工程の全体を統括し、完成品を企画し制作し、マーケティング活動も行う。職人としての腕に自信を持ち、問屋支配による抑圧を受けてきたとの思いが強い。時代の風は彼らを後押しし、雑誌などのメディアでも紹介され、消費者と直結するパイプを築いてゆく。

しかし作家に対しては、無名性こそ大切だと柳宗悦らの主張もある¹⁵⁾。事実、売名行為のようなケースも増えており、本ものの性を見極めが重要になる。このような葛藤を超えて、職人が経済的に自立し、創造性のある力強い仕事を残すために、職人と消費者が直結的な関係を結べるコモンス型の市場が構想される必要がある。

(5) 産業集積の論理

規模の利益を考える際のまとめとして、多様な小規模企業が集積した産業の強みを解明した伊丹敬之氏の「産業集積の論理」から学ぶこととしよう¹⁶⁾。氏は、なぜ産業集積が継続し拡大するのかと問い、産業集積地には需要の変化に対応しうる柔軟性があるからだとの解を導き、そこから論を展開する。

まず、その柔軟性をもたらす要件として、①技術蓄積の深さ、②分業間調整費用の低さ、③創業の容易さをとりあげる。そして、蓄積が必要な技術は、熟練した技術とともに感性（色彩感覚など）であることや、個人や設備に属する技術だけでなく、企業や地域が蓄積している共用技術であると指摘する。また、熟練の意味を、仕事の根本にある原理を理解することであり、それが深いほど応用が効くので、変化に対応できると説明している。

さらに、この柔軟性要件は、①分業の単位が細かいこと、②分業の集まりの規模が大きいこと、③企業間に濃密な情報の流れと共有があること、という要件がセットで揃って円滑に実現すると論理を展開している。

ここから学ぶべきことは、小規模が強みになる要件である。要約すると、小規模であるがゆえに開業が容易で専門性を高めやすく（間口は狭く・奥行きは深く）、小規模が強みとなるには、地域内での関連業の集積の厚みがあり、切磋琢磨する前向きな競争と、情のある情報による協

14) 岩田（1999, p.137-139）では、職人から成長した作家を産地イノベーターとして位置づけ、少し詳しく論じている。

15) 紬織の人間国宝である志村ふくみは、かつて伝統工芸展で受賞した際に、「名なき仕事」を自分だけの名誉にした、として民藝運動から破門されたという。志村・鶴見（2006, p.77）。

16) 伊丹敬之ほか（1998, p.11-19）。

調・信頼関係によって、市場の変化に対応した柔軟な事業編成ができることであろう。

また伊丹氏は、集積が一つの「場」を形成することの重要性を指摘している。場とは、狭い地域で、人々の接触や観察の頻度を高め、文化と情報を共有している状態を意味し、その背後には、共通理解を基盤とする地域共同体が存在することを指摘している。

II 職人仕事の本質

工業化社会にあつて、職人仕事の価値はほとんど見捨てられてしまった。失われてから価値に気づくことがよくあるが、その愚をおかさな賢明さを獲得しよう。職人を一番書きたかったという永六輔は、「僕は職人というものは職業じゃなくて、「生き方」だと思っている。その生き方、考え方を言葉から探ってみることにする」と書き出し、「徒弟制度の世界はモノもつくってきたけど、ヒトもつくってきたんだ」などという、数多くの職人の生きざまを表現した言葉を紹介している¹⁷⁾。

職業としてサラリーマンなどと比べると、給料や社会保険などの近代的な機能面では太刀打ちできないが、生き方・考え方や人をつくるなどの外部性があるから魅力がある。ではなぜ、職人の生き方に魅力があり、人間をつくるなどといえるのか。職人仕事の本質に迫ってみたい。

1. おもてなす関係

職人仕事の本質として、人との関係性・自然との関係性を深める仕事であることをまずとりあげたい。職人の世界などでは、何げなく用いられることの多い「おもてなし」という言葉の意味を、J. ラスキン (1819-1900) の固有価値概念と対照しながら確認することによって、他者との関係性を深め・活かそうとする動機が職人仕事の本質であることを解明したい¹⁸⁾。

伝統産業や老舗企業の世界などでは、「おもてなしの心」を大切にしていることを強調することが多く、一般的には、心をこめた接遇という程度の意味で用いられているようだ。また、最近では、近代的企業経営のなかでも、「ホスピタリティ」の類語として扱われる場合もある。おもてなしの語源や語意としては、「表も裏もない正直さ」などとする説もあるようだが、「〇〇をもて、成す」に由来する言葉として解釈してみよう。仕事で相対する相手 (人・社会・自然) を「成す」ことに仕事の本質があるのではないか¹⁹⁾。

まず、人との関係性については、「お客様をもて、成す」ことがおもてなしの基本であることは言うまでもない。ここで肝要であるのは「成す」の意味をどう解釈するかである。辞書に

17) 永六輔 (1996, p.3, p.38)。

18) ラスキンの固有価値論を現代に蘇らせた池上惇 (2003 など) を参照。

19) 「おもてなし」の意味づけについては、社団法人京都食品産業協会の中期ビジョン策定の過程において、野村善彦会長の指摘に触発されて、固有価値論と同質であることに気づかされた (2009年3月)。

よると「成す」とは、「存在しなかったものを新たにつくりあげる、成しとげる・仕上げる、これをかれの状態にする」などと説明されているが²⁰⁾、「対象の潜在的な本質を見究め、その本源的な価値を生かしきり成就せしめること」という意味として理解しよう。したがって、「お客様をもて、成す」とは、お客様が本当に欲しているものを見極めて、心からの満足を得さしめる、という意味になる。

また、顧客との関係性だけでなく、人との関係性は、取引相手や仕事仲間、従業員との関係、地域社会とのつきあい方など多様である。いかなる相手に対しても、相手をもてなす心構えこそが重要であり、「取引先をもて、成す」とは、取引先がもっている本来の価値が引き出されて成就することを手助けすることであり、「従業員をもて、成す」とは、従業員の潜在的能力を見出して、その人らしく一人前に育ちゆくことを支援することであり、「社会をもて、成す」とは、社会の構造や課題の要因を研究し、自らの役割を見出して関係者と協力し、社会の本来の魅力が十全に発揮できるようにするという意味になる。

次に、自然との関係性については、仕事の対象となる自然物（素材）「をもて、成す」ことが、おもてなしの真意である。たとえば、ある百姓（農家）の場合は、米や野菜という植物の固有の性質を見究めて、その能力が遺憾なく生かされるように世話することが、また、石工（建築家）であれば、多様な鉱石の多様な特性を選び取り、石材の能力が遺憾なく発揮できるように加工・調合し適材適所に配置することを意味する。

このように考えると、あらゆる職人仕事に共通する本質が明らかになる。その本質とは、自然との関係性をおもてなしの心構えで律し、理性・感性・身体機能などの自らの持てる能力を全面的に開発しながら、自然物である素材の性質や構造をよく観察し深く理解し、素材が持つ固有の価値を活かすためのノウハウ（技と美）を生涯かけて磨き続けること、といえるであろう。

以上により、職人の世界で何げなく語り継がれてきた「おもてなし」の言葉が、ラスキンが唱えた固有価値（intrinsic value）概念と結びつき、職人仕事の本質をさししめず言葉として蘇るのである。ラスキンは、固有価値と美について、滝の上の樹木を例にとりあげて、次のように説明する²¹⁾。

滝の上で風に吹かれて幹を撓わせる樹木も・・・幸福だから美しい。その樹木の幸福への私達の非利己的な共感から、美の感動が生じる。しかし、この幹が伐採され、鋸に挽かれて単なる板材になれば、役には立つが、固有の価値は滅失してしまう。

ラスキンの固有価値とは、「life（生）を支える絶対的な力」であって、たとえば小麦は、身体にとって本質的なものを持続的に支える力、きれいな空気は体温を支える確固とした力、群

20) 新村出編『広辞苑』岩波書店、第二版補訂版（1982年）による。

21) ラスキンの原著（1846年、邦訳2003年、p.174）。

生した花はハートを活性化する確固とした力であるという。それらの力が内在していて、その独自の力はそれ以外の物には存在しない。したがって、対象物に内在する固有価値を見いだし、引きだして、受け手の生きる力に貢献することによってこそ、真の富を実現することになる。このラスキンの固有価値論は、産業が近代化されるまでの職人の世界が伝統的に培ってきた人類共通の価値観を表現したものといえる。

職人仕事の範囲は実に多様で広範に広がる。伝統を引き継ぐ織り・染め・縫いなどの職人や焼物師、塗師、大工、左官、庭師、鍛冶屋、酒造り職人、百姓や漁師などの職業には、職人性が色濃く残っている。また、近代産業の基盤を支える町工場にも多様な職人仕事が存在する。現代の若者にも人気の高い、ギターやピアノなどの楽器職人、バットづくりの職人、シェフ、パティシエ、マンガやアニメのデジタル職人など、数えあげるときりがないほどである。そして、職人仕事に共通するのは、他者との関係性を深め・究める「おもてなし」の追求である。

2. 技を磨く

職人仕事の本質は技を磨くことだといえ、だれも異論はないであろう。しかし重要なのは、技を磨く意味を深く理解することである。職人仕事とは、人間が主となって自分の身体と道具を使い、技を磨いて仕事を完遂させることであり、機械を主とする工業とは原理が根本的に異なる。

技を磨くとは、身体を使って何度も繰り返し鍛錬し、身体で覚えることであり、そのための道具も、自分の体の一部として使いこなすことである。

職人仕事に長年従事していると、たとえば絞り加工の熟練職人に聞けば「指先が勝手に動くようになる」などという²²⁾。このことは、自分の頭脳が命令や監督をしなくとも、指先の意識が覚醒されて、指先自らが判断力をもつようになる、と言い表せるであろう。現代人にとっては、不思議に思える身体感覚や能力であるが、「手に記憶させる」などという表現は、名人や達人の常套句である。自転車の乗り方を、頭ではなくて体で覚えるといえ、現代人でも分かりやすいであろう。職人の聞き書き行っている塩野氏は、次のようにいう²³⁾。

技は言葉のように短時間では記憶できないということは、職人たちは長い経験から知っていた。技はいくら言葉でいってもわかるものではない。やってみて体が覚えなくては仕方がないのだと。…そのために徒弟制度というまどろっこしく、時間のかかる制度が採用されてきたのである。

技を体で覚えるとは、小脳に記憶することであり、そうなると大脳が意識せずに身体バランスや筋肉の調整などを小脳がつかさどるようになる。大脳が言葉による情報入力ですぐに理解

22) 有松絞りに子どもの頃から従事していたという老婦人の話し。

23) 塩野米松 (2001, p.211)。

しうるのに対して、小脳が機能するのは、身体を使う作業を繰り返すことによって、脳と身体の回路が通じるようになるからであろう。

多くの現代人は、手や指などの身体を「自己」とは認識せず、自己が支配し働かせる物体として見なしている。自己の範囲を、意識しうる頭脳の働きと随意になる神経に限定している。しかし、全身を自己として感知できないことに由来する心身の葛藤やストレスは、すでに広範に認識され、多くの病弊の要因になっているようだ。それを克服するために心身を統一する多様な道（修行）があり²⁴⁾、職人仕事では、仕事の中に統一の道が組み込まれているといえよう。

身体論や教育実践で画期的な成果をあげている齋藤孝氏は、腰や肚という中心軸の身体感覚を取り戻すことの重要性を指摘し、和裁師の技を写真で示しながら次のように評している²⁵⁾。

見事な腰の決まり方である。上半身であれこれと作業しても、腰から足の先まではピタリと決まって動かない…足の指先から膝・腰・背骨・首・手の先まで、それぞれが独立しつつ統合されたトータルな身体感覚である。

また齋藤氏は、このような身体感覚が失われ、足腰の弱화가自己の存在感の希薄化にもつながっているという。日本の国が腰や肚をつくる身体文化を喪失し、多くの人が心身のバランスを崩し、神経過敏になって呼吸が浅くなっている。このような主張が、大きな共感をもって受け入れられた。

職人仕事には、仕事上の技の上達をめざす過程に、分離しがちな心・身を統合させ、肚の据わった達人をつくるという、人としての成長のプロセスが組み込まれているのである。

3. 構想を練る

仕事の対象となる自然の固有価値を生かし、使い手に共感・感動をもたらそうと創意工夫する職人の努力は、技を磨くという身体的な活動とともに、構想を練るという精神的な活動にも向けられる。職人仕事には、仕事の全体を見渡して手順を考えたり、顧客の要望や材料の有無などを勘案して全体を企画し準備する「段取り」や「算段」の重要性を自戒する言葉が多く残っている²⁶⁾。考える人は別において、指示どおりに働くことを求められるフォード流の工場労働者とは根本的に異なるのである。職人仕事には、人間しかできない頭脳の・精神的な活動が多分に含まれていることを忘れてはならない。

法隆寺などの宮大工の棟梁として、人間国宝としても著名な西岡常一氏の、次のようなこと

24) 多くの武道や芸能・芸ごとなど、伝統的な習俗に含まれている。

25) 齋藤孝（2000, p.103）。

26) 小関智弘（2006, p.207-213）。

ばが書き残されている²⁷⁾。

昔は設計、積算、施工、全部棟梁がやった。..しかも山に入って木を見てみて、あの木ならここに大丈夫..と木に対する信頼ができています。そのうえで設計しますわな。それが今のは設計と施工が別になってまして..材料の生まれ育ったままを生かして使うという考え方をいつも念頭において設計しないとあきまへん。

このような職人の構想力は、固有価値を生かし新たな価値を創造する観点からは、ますます重要になる。機械にはできない、人間ならではの深い精神的活動が多様な局面で求められる。

第 1 に、素材のもつ多様な固有の価値を見出して生かす「本もの」を生産する局面がある。本ものと偽ものの相違は、風合い・色合い・肌ざわり・心地などなどといわれるような、日常の暮らしの中での感触、湿気・湿度や水分の量と質、日光や照度・空気感・音色・塩梅や塩加減などとして感受される。しかしこの微妙な感性的な違いが人々の気分に大きな違いをもたらす、時間の蓄積とともに心身に大きな影響を及ぼす。ストレスから来る神経症やアトピー症の蔓延などは、本ものの性の喪失に関係するのではないか。

月刊『左官教室』を編集する小林澄夫氏は、現代建築のつまらなさを、素材がもつ多様な「無償性」への感受性のなさに起因すると論じ、「土のことは土に習え」と次のように述べている²⁸⁾。

かつての民家や土蔵をかたちづくった建材は、建材である以前に、それぞれ固有の存在であって、建材としての限られた一つの意味しかもたない部品ではなかった。木の窓枠は、窓枠であるとともにそれ以上のもの、いわば樹であった時代の記憶をもち、土の壁は大地の記憶をもっている。..限られた意味へと素材を殺ぎ、切り落としていくのではなく、できるだけ多様な意味をそこから救済しようとする、そこに技術というものがある。..無償性を失い単一の意味で充足した空間は息苦しい。

ここで指摘される「無償性」への着目は、外部性の認識にほかならない。素材が持つお金の換算できる機能しか評価しないのが現代建築であり、お金にならない多様な価値をも生かす技術をもつのが本当の職人である。むしろ、無償性の中にこそ生命を支える力が潜んでいる可能性を見いだすのが職人である。

第 2 に、同じ石材や木材でも、一つひとつが異なり個性があるので、その個性を活かすための探求・工夫をこらす局面がある。また、個々の性質の違いがわかり、違いを活かすことができる熟練の技能水準をめざす。また、製品の使い手にとっての使いやすさや心地よさに思いをはせ、「娘を嫁に出すように」末永く大切に扱われるよう心をこめる。その結果、深いレベルの原理を体得し、いかなる注文や状況変化にも正しく応じられる現場での柔軟な対応力(即

27) 原田紀子 (2006, p.26)。

28) 小林澄夫 (2001, p.30-31) 一部略記。

興性)の幅を広げる。

自然の素材を生かす場合には、「石に聞けば、石がどこにおさまりたいか、石が教えてくれる²⁹⁾」というような無為自然の境地が尊ばれる。石を知り・石に親しみ・石と格闘してこそ得られる石との一体感が生まれ、石の気持ちがわかり、石のささやきが聞かれるのであろう。対象への気持ち・思い・愛を込めた職人仕事から得られる境地がある。

第3に、職人仕事による統合的アプローチの局面を考えよう。統合的アプローチでは、存在するそれぞれに存在理由があり、排除せずに受け入れられるべきと考え、個々の違いが対立を生むのではなく、違いを活かしあい、より高いレベルで統合しようとする。この場合の職人仕事は、いま・そこに存在する素材と深く対話することを通じて、素材の中に固有価値を見だし、固有価値を活かしあう新たな生命・価値を吹き込んだ統合体を創造することである。そこで産まれた創造物は、使い手の生命・生き方をささえるのである。

この考え方は、最近ヨーロッパでよく主張されるソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）の考え方と共鳴するものであるが、職人の世界が「熟練者ばかりではなく、未熟者や子供、老人、障害者にも役目があり、自然の営みに人の営みが組み込まれていた³⁰⁾」という「排除しない社会」を形成していた価値を大いに評価すべきであろう。個性を生かしうる新たな仕事をつくることに努力するとか、能力は潜在していて出番がないと出てこないで出番をつくろうとする、などは、NPO 経営者などから聞かれることばであるが、職人仕事に非営利性を自覚的に持ち込むことが、その本来の価値を発揮することにつながる。

多様で異質なものを一つの調和体にまとめあげる構想力は、職人から成長した作家やプロデューサー、デザイナーなどにとっては、特に重要な能力となる。バラバラになった人や物などの価値を再評価し、かけがえのない貴重な資源として再結集して、きものや家や庭、あるいは食卓や農場や教場を創造する能力が、いま求められている。

第4に、職人仕事は「いのちの連続性」の中で、「自然の営みによって、成す」という純粋で高度な精神的活動が求められる局面がある。一つの局面というより、これを職人仕事の真髄ととらえるべきであろう。職人自身は、自然から与えられたいのちであり、職人の技をもって自然の営みに参加する。素材を単なる物として扱うのではなく、石のような無生物であっても、いのちあるものとして崇拜し・対話しつつ、そのいのちをいただき、新たないのちを吹き込むという、まさに創造的な仕事である。その生産物は、受け手のいのちを支えるものとして生かされ、仕事は自ずから神聖性を帯びたものとなる。

材料や製品はもちろんであるが、職人が使用する道具にも、いのちは宿っており、「針供養」のごとく、使った後は供養して自然に帰すという行為を行う。いのちあるものとして知覚し、

29) 小関智弘 (2006, p.166) が紹介する、穴太積みの熟達した職人のことば。

30) 塩野米松 (2001, p.250)。

自然から授かった同じいのちとして扱うことによって、自分のいのちとの共鳴感が生じ高まる。

対価を支払い所有権を獲得したのだから、自由に消費・使用するの当然の権利だという経済合理主義の考えが蔓延する社会では、自然の営みに感謝し相手を尊敬するという気分は希薄化されてしまう。「自然との共生」を石油会社や電力会社がとなえても、心には響かない。万物に内在するいのちを感じ、気持ちを通わせる能力を回復し、エネルギーと資源の浪費を回避しながら「自然の営みによって、成す」職人仕事の真髄を再認識することは、自然に順応した社会を回復するための中心的な課題となる。

4. 人としての成長

職人仕事は「モノもつくるが人もつくる」などと言われても、その意味は断片的にしか明示されていなかった。しかし、小論で述べてきたように、その本質を理解し、優れた事例を考察すれば、単に人をつくるというより、成長し上達した人、つまり人格や人徳のある人をつくると考えるべきであろう。

ここでいう人の成長とは、特定の意識のある人が求めるものではなく、万人が求める人としての成長の道である。固有価値を引き出すノウハウの水準を高めようと、「おもてなし」の心で他者に献身する仕事を通じて、とかく現代社会で疎外され・断片化された自己が次第に自由になり解放される。自我の殻をゆるめ、自己の全体性を肯定し、心身一如や彼我一体という境地に至る道が準備されている。これは、現代流に割り切ってしまうと、仕事の上達し富を得、人としての徳もそなえることのできる「一挙両得」の道である。

(1) 民衆工芸論

職人仕事を通じて人として成長することは、すでに柳宗悦 (1889 - 1961) が主張していたことである。氏によると、職人仕事は本来、用と美 (実用性と芸術性) を兼ね備えたものであった。近代以降の工業が、日常の労働や生活から芸術性を切り捨てて実用性 (機能性と価格) を追求し、芸術を「純粹」芸術の枠組みに押し込んだのである。

柳は、ラスキンやモリスらの影響も受け、民衆が日常に使用する普通の品々 (雑器) の中にこそ美があるという民衆工芸運動を推進した。彼は、『手仕事の日本』の中で、「日本は手仕事は今でも盛ん、西洋の過失を繰り返さず、手仕事の日本を」と終戦直後の日本人に呼びかけた³¹⁾。手仕事の良さを、民族的な固有な美しさがあること、手堅く親切に作られること (自由と責任が保たれる)、仕事に悦びが伴うこと、新しいものを創る力が現れること、最も人間的な仕事であること、として高く評価している。

また、氏が 30 歳代後半に執筆した『工芸の道』においては、工芸への接近の途として、経

31) 柳宗悦 (1985, p.11-13, 原著 1946)。

済学的な途はラスキンらのギルド社会主義が行ったので、審美的な途を日本人の任務としようと、自らの使命を述べている。その考え方を表現したことばを書き記しておこう³²⁾。

- ・味なき日々の生活も、工藝の美しさに彩られる。心を和らげようとの贈りもの。彼らの美に守られずして温かくこの世を旅することはできぬ。
- ・美の標準が誤られている今日、工藝の美の基準を明確にし、正しい美の考察こそ最も緊要。
- ・工藝美は、民衆、実用、多量、廉価、通常などの平凡な世界にある。
- ・平凡な民衆の人生の背後に驚くべき節理がある。自然の叡智（無心な自然への帰依）、相愛の制度（結合せられた衆生の心）である。
- ・日常の雑器は、「用」と結合するがゆえに美がある。多量に作られる廉価な物、誰でも買える品々、最も平凡な持ち物にこそ美がある。用途を離れては（飾り物になれば）器の生命は失せる。
- ・近代以前には、全ての作物が工藝性を持っており、美術は発生していない。美術は、近代の個人主義により工藝から分離して発生した。

柳氏の特徴は、西洋の個人主義や近代的な自我に大きな限界を見ていることである。そして、用（他者への献身）に徹することで無心に至り、無心や無我の境地に自然の叡智と美が現われるのであるから、無心に・大量に繰り返す職人の平凡でひた向きの作業を貴重なものとした。職人仕事の平凡の中から生まれる品々と人生の輝きの指摘は、驚きと感動をもって迎えられ、日本社会に大きな影響を及ぼし続けている。

（2）上達の道

町工場や職人を励ます「粹な旋盤工」である小関智弘氏は、職人の世界では「自分を超えるような職人を育てられないような職人は、自分を半竹だと思え」という考え方が普通であったことを紹介している³³⁾。また、職人が師匠を選ぶ際に、勢いにつく・情けにつく・恨みにつく、の三通りのタイプがあり、そのうち、師に怒られても何くそと頑張っていく「恨みにつく」職人が師を超えようとしていい職人になるという³⁴⁾。

志村ふくみ氏の場合は、ゲーテの『色彩論』やシュタイナーの『色彩の本質』から直感を得て、色彩の道を究められたようだ。氏は自身の体験に基づいて、色には生と死やいのちに関わる意味がこめられていて、人間が色を出すのではなく、植物から色をいただくと思った時にはじめて、植物の方からほんとうの色を見せてくれる、という³⁵⁾。こちらの感じる能力が高まり、気持ちが通じるようになった時にはじめて、植物が自分を投げ出して私達に色を見せてくれるというのである。まさに自分の感性を純化させねば、仕事の限界に突き当たり、人格を磨きな

32) 柳宗悦（2005，原著1928）。

33) 小関智弘（2006，p.8）。なお、半竹（はんちく）とは半人前のこと。

34) 同上 p.11-12

35) 志村・鶴見（2006，p.134）。

がら、仕事の上達をめざすという道である。

職人の上達の道とは、他者の固有価値を見いだして生かす職人仕事に打ち込むことを通じて、自己の固有価値を見いだして生かす道を自ら拓いていくことである。自ら拓くとはいえ、職人仕事には名人や達人と呼ばれる人が、現実にあるいは歴史的に存在しており、名人や師匠は、後進や弟子からすれば、めざすべき具体的な目標である。人間国宝や名工などとして顕彰された人々だけでなく、名もなく静かに暮らすまの達人も多い。

職人仕事の上達の道筋は多様であるが、めざすべき峯は共通している。したがって、修業途上の職人の熟練度や上達度が、かなりの客観性をもって評価されるのである。そのため、職人仕事の中からは、自ずからの尊敬と承認の気持ちが生まれ、安定した人間関係が形成されやすい。近代的な契約社会は、たとえ営業成績が高くても人間的に尊敬されるとは限らない、心理的に不安定な社会である。仕事そのものが尊敬にあたいし、仕事の上達と人間的な発達が相乗する職人仕事であるがゆえに、仕事を通じての尊敬と承認が可能となり、安定感のある組織が形成される。

職人仕事における上達の道とは、人格形成の道である。職人仕事の本質が、他者との関係性を深め極めつつ、固有価値を実現することにあるということは、職人の上達の道とは、職人仕事を通じて自己を磨き、究極的には自と他との壁を超えた境地に至る道のことである。

伝統社会では、このような自他が統合する意識に到達する道を歩むことを自らに課し、武道や芸事の多くを「道」と名づけてきた。近代以降の産業や経済からは追放されてしまったが、日常の仕事に精進し人格を磨く道が、職人仕事には存在するのである。これは、固有価値の追求によって開かれる道（職人道）であり、日本に限定されず世界に通用する価値観であろう。

(3) 職人道

仕事を通じて人としての成長が図れる職人仕事は、所得を得るだけでなく、修業の道でもある。辛く長い徒弟の年季奉公も、単なる親方の横暴ではなくて、理にかなった側面が多かったとの再評価もなされる。しかし、職人道のモラルが低下すると、親方や兄弟子たちの理不尽が横行し、仲たがいが生じ、がまんできずに親方の下から逃げ帰ろうとする弟子も出てくる。こうなれば、職人仕事は自壊をまぬがれない。

そこで、現代社会に通用する職人道の再構築が求められてくる。ここでは、人をつくる師弟関係に絞って考える。まず師匠（経営者）は、弟子（従業員）の固有価値を見だし成長を助けようとする、慈心のある存在でなければならない。仕事場で職業上のカンやコツを伝授するとともに、生活をともにしながら、考え方や感じ方、話し方や動き方などが自然に伝わる。文化の遺伝子が刷り込まれるがごとく、分身のような人間となるので、責任は重大である。次世代の人材を育てることによって、自らの人格をさらに磨いてゆく、これもまた容易ではない師としての生涯をかけた修業の道といえよう。

弟子は、素直に、感謝と尊敬の念をもって修業に励み、師や先輩が身につけたノウハウをありがたくいただく。簡単な仕事を見よう見まねで手伝いつつ、仕事の現場でしか分からない仕事のコツを、感性・知性と身体能力を全開させ身につける。教えられ、指示されるものではなく、自ら学び・興味を抱き・好きになって、我を忘れて仕事の対象と格闘し没入しながら、技を磨く。師はその様子を見守りつつ、先達としての手助けをする。

この師弟関係の中で、社会的存在としての人間がつけられる。職人仕事はまさに、モノをつくりながら人をつくる、人生最大の事業といえよう。したがって、職人道を現代化するには、師たる者に対する高度で専門的な教育がまず不可欠であろう。

5. 文化資本

職人仕事の本質を文化資本の概念と関連づけて考えてみよう³⁶⁾。第1のステップとして、職人仕事は、文化資本を基盤として生まれると考えることができる。職人仕事は、地域の自然物を素材とし、地域に伝わる伝統的な技や美を継承しつつ、その時代の創意をこらして、眼の肥えた顧客の評価に応える品々をつくる。地域の文化的な土壌を耕して、そこから智恵やノウハウを引き出し、創造の力と活力を得るのである。第2のステップとして、文化資本を基盤とする職人仕事から産みだされた品々には、文化的な生命力が付与される。この文化的生命力によって、文化的・精神的な価値が、地域社会に広く・また長い期間にわたって及ぶ。第3のステップとして、文化的な生命力を付与された職人仕事は文化資本となって、地域で永く共有される。

では、文化的な生命力が宿った文化資本は、どのような効果をいかにして地域にもたらすのであろうか。

第1に、職人仕事が産んだ生産物を購入した人に対しては、単なる実用性だけではなく、文化的な価値を与える。たとえば郷土の誇り、地域の絆の象徴、懐かしい思い出、子孫への贈りもの、などがある。

第2に、その品自体がもつ品格の良さが、購入した人に止まらず、それ以外の人々へ好影響をもたらす。その場に集う人々の気持ちを和やかにし、場の空気感を清浄にし、会話をはずませるような効果を持つかもしれない。これは、この品の持つ外部性の認識の第一歩である。さらに、その魅力と場の空気が人を引き寄せ、人々を結びつけて社会関係資本を形成し、コミュニティを再生する場となり、まちづくりのコアとなるかもしれない。

第3に、小論で強調してきたことであるが、職人仕事のプロセスで人間の上達した心身をつくり、その結果、職人自身が文化資本になる。この職人に体化された文化資本としては、①

36) 文化資本の概念は、スロスビー（訳 2002, p.78-84）を参照。

職人の身体が記憶したものづくりノウハウ、②対象のささやきから聞き取った自然の叡智、③従業員や顧客との関係から学んだ人的能力開発のノウハウ、④市場や取引から学んだビジネスの智恵、⑤自らが実験台となって獲得した心身作法、などが考えられる。これらは、職人仕事から得られる「至宝」ともいえるものであり、周囲の人々や次世代への教育的効果は測り知れない。

第 4 に、職人産業の成果が文化的な影響力をもつことによって、地域の新たな産業発展の核となり、地域への大きな経済的な効果をもたらす。このことは、次節で述べる。

このように、卓越した職人仕事は地域の共有財産になり、他の文化資本とも共鳴しながら地域の文化資本を形成し、様々な文化的価値と経済的価値を地域にもたらす。地域の文化資本を土壌として誕生した職人仕事は、地域の文化資本の厚みをさらに増して地域への恩返しを果たすのである。

III 職人経済の展望

現代の産業は、様々な局面で行き詰まりに直面しているが、それに代わる産業の展望が見いだせない。大工業の限界の最たるものとして、生産力の過剰をもたらす慢性的な経営危機、つまり、企業経営を圧迫するコモディティ化をあげることができる。他社との技術差はすぐになくなり、差異化を価格差でしか見いだせない価格競争の消耗戦に陥るのである。このコモディティ化の罠から抜け出すために、経験価値、意味的価値などを重視する新たな概念が提起されている³⁷⁾。経験価値とは、製品を小道具として、思い出に残るサービスを出来事として提供し、顧客を魅了するときに生じるといふ。意味的価値は、機能的価値が客観的に決まる価値であるのに対して、顧客の主観的な解釈や意味づけによって決まる価値だといふ。

これらの価値は、工業製品が機能性・実用性を追求し、顧客の心に届く美や芸術性を切り捨ててきた結果、失われた価値であるが、今それを復活させないと顧客のニーズに答えられず、利益もあげられないという経営者の気づきが広範に起こっている。表現を変えれば「用と美」の再統合が求められているのであるが、これは職人経済が実現してきたものである。用と美を兼ね備え、固有の物語を秘めた、記憶に残る・心に響く品々こそ、職人仕事の特徴である。

職人仕事は、社会の重要な側面として位置づけられる職人経済は、経営サイドのニーズからも不可避的に生じてくるだろう。さらに興味深いのは、ラスキンの芸術経済論やモリスの生活の芸術化論などの議論を総括し、現代に適応しうる統合モデルとして提示された池上惇氏の産業発展の三層構造論である。氏は、産業の展開を<創造・複製・回帰>という三層の循環構造

37) 経験価値は、バインII&ギルモア(1999)、意味的価値は、延岡健太郎(2008)による。また、経済産業省では、感性価値を重視する産業政策を2007年度から進めている。

としてとらえる³⁸⁾。

要約していうと、素材の固有性を生かしてオリジナルな本ものをつくる〈創造〉の過程を基点として、創造の成果を複製・量産して普及・伝達する〈複製〉の過程、複製に触れて創造過程に参加・体験する〈回帰〉の過程、という循環構造が描かれる。創造の過程では、人の熟練やノウハウが重要であり、このままでは利益を生まないが、複製の過程では、量産化技術や情報・輸送技術などを活用した産業化が可能になり、大方の利益はこの段階で生じる。回帰の過程では、複製によって多くの人々が本ものを疑似体験しつつ享受能力を高め、創造の現場に参画する人々が現われ、創造の場での作り手と使い手の対話・交流から創造の質をさらに高めるといえることがおこる。

このように産業の循環的発展構造を統合的に観察することによって、創造を起点とする顧客や市民をまきこんだ産業発展という展望が見えてくる。そして、職人仕事の本質を理解するならば、職人仕事が創造の基点に位置づけられることは明らかであろう。熟練を要する職人仕事を創造過程の中心にすえ、その複製や量産でコストを下げ普及を図り、ボウモル病に陥り所得不足を余儀なくされる創造過程に資金を回す。そうなれば、職人仕事をコアとする広がりのある経済システム（職人経済）を構想することが現実の課題として浮上する。

この職人経済が成り立つ前提として、熟練した職人による手仕事品と機械による量産品の違いを見分けるような享受能力の存在が必要である。「四十八茶、百鼠」などといわれるように、日本人の色彩を見分ける美意識の繊細さが、質の高い職人仕事を支えてきたのである。色彩に限らず、「氣」を感じ取る能力や「間」を読み取る能力などの享受能力の涵養は、芸術教育や社会教育の充実を含む地域社会全体の課題である。

最後に、職人仕事の総合的な性質について簡単に付言したい。ラスキンや柳は、職人性の中に一体として備わっていた実用性と芸術性が、工業と美術に分離したと見立てている。しかし、職人性に含まれていて、そこから分離したと思われるもう一つの重要な要素として、スポーツがあるのではないか。スポーツが隆盛する現状を見ていても、純粹美術と同じような脆弱さを感じられる。速さや強さや高さで勝ち負けを争い、自己の心身の鍛錬にはなるが、「おもてなしの心」が欠けるのである。他者の固有価値を生かすために無心になって献身する、その結果として自己の心身の発達が得られるという、いのちの連鎖に身を委ねたところから湧き出る自然の力に欠けるのではないか。

このように考えると、職人仕事もっていた総合的な力を再確認せざるを得ない。人間が獲得した能力の結晶が職人仕事ではないだろうか。

38) 池上惇 (2003, pp. 119-124)。

あ と が き

この小論で対象とした職人は、筆者の体験上、伝統産業の職人をイメージしている。しかし、現代の職人性は随所に存在し、減んでいるようにも見えるが、プロフェッショナルとして時代の先端で活躍している人々もいる。この両者を繋ぐような共通項を取り上げ、職人性の広がりを用意したつもりであるが、整理はまだ不十分である。

また、小論が当初目論んだのは、ボウモルの舞台芸術の外部性に習って、職人仕事の外部性を抽出することであったが、その前提となる職人仕事の本質を書き終えたところで、時間切れとなった。職人仕事の外部性と、外部性を内部化する社会制度を考える作業は、今後の課題として残された。

職人仕事の本質を考える作業は、実に興味深く、いくつかの自分なりの発見もあった。その発見や驚きを率直に書き記したので、軽率さやことば足らずなどが多々あると思う。ご批判ご叱正をお願いしたい。特に、現代の若者には、雇われない生き方で自立・自営しながら、人として成長し徳を積む働き方があることを伝えたい。そのためにも、職人経済が成り立つ社会を求めたい。

柳ヶ瀬孝三先生には、学生時代からの先輩として、また大学教師の道の先達として、大所高所から様々なご指導ご厚情を賜ってきた。この小論も、先生を座長とするコミュニティビジネス研究会での議論から生まれたものである。日頃のご指導を心から感謝申し上げます。先生のご健勝とご多幸をお祈りするばかりである。

【参考文献】

- 足立政男 (1970) 「家業永続の秘訣」, 京都府編集発行『老舗と家訓』所収
足立政男 (1974) 『老舗の家訓と家業経営』 広池学園事業部
池上惇 (2003) 『文化と固有価値の経済学』 岩波書店
伊丹敬之・松島茂・橘川武郎 (1998) 『産業集積の本質』 有斐閣
岩田均 (1972) 『京都糸染業界診断報告書』 京都府立中小企業総合指導所
岩田均 (1974) 『京都手描友禅業界診断報告書』 京都府立中小企業総合指導所
岩田均 (1999) 『産地再生戦略』 地域社会研究所
永六輔 (1996) 『職人』 岩波新書
小関智弘 (2006) 『職人ことばの「技と粹」』
後藤和子 (1998) 『芸術文化の公共政策』 勁草書房
小林澄夫 (2001) 『左官礼賛』 石風社
斎藤孝 (2000) 『身体感覚を取り戻す』 日本放送出版協会
塩野米松 (2001) 『失われた手仕事の思想』 草思社
志村ふくみ・鶴見和子 (2006) 『いのちを纏う』 藤原書店
土井乙平 (2006) 「伝統継承と日本的文化」『経営経済』第 42 号所収
延岡健太郎 (2008) 「価値づくりの技術経営」一橋大学イノベーション研究センター
原田紀子 (2006) 『西岡常一と語る 木の家は三百年』 朝日新聞社

- 柳宗悦 (1985, 原著 1946) 『手仕事の日本』 岩波文庫
- 柳宗悦 (2005, 原著 1928) 『工藝の道』 講談社学術文庫
- スロスビー (2001) 『文化経済入門』 (中谷武雄ほか訳 2002, 日本経済新聞社)
- パインII & ギルモア (1999) 『[新訳] 経験経済』 (岡本慶一ほか訳 2005, ダイヤモンド社)
- ラスキン, J. (1846) 『構想力の芸術思想【近代画家論・原理編II】』 (内藤史朗訳 2003, 法蔵館)
- Baumol, W. J. and W. G. Bowen (1966) *The Performing Arts: The Economics Dilemma*, The MIT Press. (池上惇ほか監訳 1994 『舞台芸術 芸術と経済のジレンマ』 芸団協出版部)
- Marshal, A. (1890) *Principles of Economics*, London Macmillan. (馬場敬之助訳 (1966) 『経済学原理 II』 東洋経済新報社)

